The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近衛篤麿の『蛍雪余聞』にみるミュンヘンの原田直次郎
Author(s)	宮本, 久宣
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2004, 38, p. 29-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48225
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近衛篤麿の『蛍雪余聞』にみるミュンヘンの原田直次郎

宮本久宣

はじめに

原田直次郎（以下、原田と略す）は、一八八四年（明治一七年）から一八八六年（明治一九年）までミュンヘンに留学し絵画を学んだ。その留学中の動向を知ることができる資料としては、これまで親友森鷗外（以下、鷗外と略す）の『独逸日記』や没後一〇年に鷗外が編集、刊行された『原田先生記念帖』[1]中の回想などが知られている。本稿では、それら以外に新たな資料として、近衛篤麿が記した『蛍雪余聞』を提示、紹介する。

近衛篤麿[2]（以下、近衛と略す）は一八六三年（文久三年）、京都に生まれた。原田と同じ年である。近衛家といえば五摂家の筆頭であり、篤麿は長男として一八七三年（明治六年）に家督を相続、始祖藤原鎌足から数えると第四五代目の当主となった。若くして貴族院議長、学習院長などをつとめ各方面から活躍を期待されていたが、一九〇四年（明治三七年）、満四〇歳の若さで亡くなっている。その跡を継いだのが長男、文麿である。

『蛍雪余聞』は、近衛が青年期に著した手記などを自分自身で整理したもので、もともとは十六分冊の形でまと

められていた。本人の死後、一九三九年（昭和一四年）に、失われていた部分を除き、財団法人陽明文庫から三冊組、限定三百部で公刊されている。[3] その後記には、四男で水谷川家を継いだ忠麿が、「蛍雪余聞は先考近衛霞山公の手録、明治十一年より二十一年まで、即十六歳より二十六歳に至る間の見聞、旅行記等を録載す」[4] と記している。

一　近衛篤麿の見たミュンヘン

一八八五年（明治一八年）四月、近衛はオーストリア公使として赴任する西園寺公望に同伴し、ヨーロッパ留学へ旅立った。六月にウィーンに到着したのち、すぐに勉学の拠点としたドイツへ移り、一八九〇年（明治二三年）九月の帰国まで、およそ五年間をヨーロッパで過ごしている。

この留学中、一八八六年（明治一九年）七月二五日から八月九日にかけて、近衛は思いがけずドイツ南部を巡る旅に出ることになった。近衛は七月二三日に、当時滞在していたボンで視察に訪れたドイツ公使品川弥二郎を出迎えたが、二日後の出発直前になって補佐官である姉小路公義に同行するよう誘われた。近衛はすぐにボンへ戻るつもりでハイデルベルクまで随行したが、さらにミュンヘンへの同行を誘われ、結局七月二七日に一行と同地へとやって来ることになった。しかし、この偶然の旅により近衛は当時ミュンヘンにいた原田や鷗外らと交流を持つことになったのである。

『蛍雪余聞』には留学中に記された文章も収録されているが、この旅行の手記は、特に「南独漫遊草」[5] というタイトルでまとめられている。それは日付を追った日記体で書かれており、日々の出来事とともに訪れた町の様子なども詳しく書かれている。その中で近衛は、ミュンヘン到着時の様子と町の特徴を次のように記している。[6]

廿七日（中略）列車はウルム、アウグスベルヒの諸市を過き七時卅分ミュンヘンに着す　此地留学の日本人加藤照麿（弘之氏の息）岩佐新（純氏の息）天形通義等出迎ふ　直に馬車を以て「バエリシェ、ホテル」に着し晩餐を喫す　之を終て加藤等の誘導に由り姉小路弥一の両氏と「マキシミリヤン、カッフェー」に登り酌む夜半寓に帰る

ミュンヘンは聯邦中バエルン王国の都府にして彼獅子王の名を博せしハインリヒ王の十二世紀に開きし市街にして其後歴代の諸王美術に心を傾け去月崩せしルードウィヒ王二世の代に巨万の負債を生せしも皆美術に之を費せしによる　此の如くなれは建築として美ならさるなく広大ならさるなく実に独乙全州美術の淵源と云へく又麦酒製造に名ありて世界中ミュンヘン麦酒の到らさる処なし　我国近来独乙ビールと称して翫味するもの即ち之なり　故に唯に独乙全州のみならす之を全世界中麦酒の淵源と云て可なり　停車場数千の白色列車を見る是皆此地より麦酒輸出に用ふるものなりと云ふ　盛なりと云へし　人口は廿三万にして其地位はイサル河の辺にあり　其地又アルプス山に連なれは其高山激流の為に気候の変遷頗る甚し

当時ミュンヘンは、人口二三万人程度。ドイツ全土における美術の中心地として認識されていたようだ。同時にビールの生産地としても世界的に有名で、駅には各地に送られるビールを載せるための白い列車が数多く停まっていたという。当日、その駅に近衛ら公使一行を出迎えたのは、加藤照麿、[7] 岩佐新など、原田あるいは鷗外がミュンヘンで親しく交流を持った人物たちである（図1）。彼らの名前は、『独逸日記』にも散見される。原田の名前はなく、出迎えの時にはいなかったようだ。ふたりが出会うのはこの翌日のことになる。

二　『蛍雪余聞』にみる原田直次郎、そして森鷗外

近衛がミュンヘンに滞在していたのは、到着した一八八六年（明治一九年）七月二七日から同三一日までの五日間だった。そのうち、原田の名前は先に紹介した二七日をのぞく残り四日間に登場する。興味深いのはこの時、鷗外もミュンヘンにいて原田とともに一行を迎えており、『独逸日記』の中にも同日の記述があることである。以下、日付を追って『蛍雪余聞』の中から主に原田と関連する部分を抜き出し紹介していくが、ここでは同じ時間を過ごした上で書かれた『独逸日記』の文章と対照させながら紹介してみたい。[8] [9] 文学的な比較、検討は本稿の目的ではないが、彼らが過ごした時間をより豊かに回顧できると考えたからである。同時に現地の写真もいくつか紹介するが、いずれも二〇〇三年（平成一五年）一〇月に筆者が撮影したものであることを附記しておく。

「七月二八日」

【蛍雪余聞】

廿八日　加藤岩佐天形三氏原田直二郎（ママ）（陸軍少将の息画学生）森麟太郎（ママ）（医学士）来訪　共に新絵画館に至り之を見る　無慮数万の絵画上は羅馬時代より下て近世に至る迄大家名流の画を集めしものなれは一として非凡ならさるなく実に一朝一夕に之を能く看尽す所に非さるなり　之を出ててマキシミリヤン、プラッツなる旗亭「シライヒ」に上り午食す　是に於て加藤等の諸氏と弥一氏は他に赴き公使姉小路余の三名は猶ほシャック伯所有の絵画館を見る　之を前の絵画館に比すれは九牛の一毛にも足らされとも一箇人の私有として見れは能く蒐集

せし者と云へし（中略）帰路一酒楼に登る　汚穢に堪へす　一杯を傾けて直に出て行くこと数歩音楽を聞く是又一酒楼なり　乃ち之に入り飲む　之を「イングリシ、カッフェー」と云ふ　此家の下婢皆肩に一の服紗様の布を纏ふ　皆白地に草花を画く　頗る異様なり　蓋し当地近傍某村の風俗に摸せしなりと　夜半寓に帰る

【独逸日記】

二十八日。公使品川弥二郎、其子弥一、近衛公、姉小路伯と伯林より至る。拝焉客館 Bayrischer Hof に投ず。

一八八六年（明治一九年）七月二八日、原田はミュンヘンにやってきた公使品川を訪ね、そこで近衛とも出会うことになった。「来訪」とあるので、原田は一行が滞在していたホテル「バイエリッシャー・ホフ」[10]へ尋ねて行ったのだろう。『独逸日記』には、公使一行が来たことだけが短く記されているのみであるが、『蛍雪余聞』によると、この時は鷗外も一緒だったことになる。鷗外はのちに「われは原田直次郎によりて品川子を知りたりき。」[11]とも記しているが、この時の面会がまさにこの記述に対応するとも考えられる。ただし、帰国後に原田と品川が親しく交流を持っていたことは確認できるが、今のところこれ以前については明らかでない。[12]

その後、一同は「新絵画館」、つまりノイエ・ピナコテークに出かけ作品を鑑賞し、昼食をともにしている。非常に単純なことながら、この近衛の記述によって原田がノイエ・ピナコテークに行ったという事実が確認できた。美術学生としてミュンヘンに留学しているのだから当然行かない訳はないだろうが、これまでの資料では確認できていなかった。他にシャック・ギャラリーの名前も出ているが、残念ながらこちらにはこの日原田は行かなかったため、同様の事実は確認できない。

「七月二九日」

【蛍雪余聞】

廿九日　加藤氏来訪す　姉小路停車場に赴く　蓋し明旦公使と之を発してサルツブルヒに向はんとす　故に長旅の切符を購はんか為なり（中略）是より「シライヒ」楼に午食す　蓋し姉小路氏と此に相会せんとの約なればなり　姉小路氏来る　即ち午食を終り原田氏を訪ひ同氏の画を見んとす　氏在らす　待つこと時余終に帰らす　同氏の家を出れは左に凱旋門あり　其内に美術校大学校あり皆偉大の建築なり　公使等馬車を駆て市街を一周せんとす　余独り之を欲せす直に寓に帰る（中略）尋て加藤森原田岩佐天形の諸氏来る　公使等一行諸氏を携へて「ホフ、ブロイハウス」を見る　此酒店一の椅子なく士官学生より馬夫職人に至る迄貴賤を論せす来り飲むに皆樽に凭りて飲む　給仕の者なく各自ら酒樽より盃に灑て飲む　此家之を以て名あり　皆「イングリシ、カッフェー」に登て離杯を傾く　夜半寓に帰る（後略）

【独逸日記】

二十九日。朝往いて公使を訪ひ、倶に朝餐す。公使容貌憔悴す。然れども軀幹偉大なり。言辞は甚謙にして、絶て夸大の気象なし。曰く性酒を嫌ふ。一滴咽を下すこと能はず。因りて常に「ショコラアデ」Chocoladeを喫す。近衛公身体豊実、語気活潑、華族中の人とは思はれぬ程なり。（中略）夜公使の一行と英吉利骨喜店Englisches Caféに至りて楽を聴く。公使余に問ふに麦飯の利害を以てして曰く。参議などの貴官は今皆麦飯を喫すと。余大澤の論を是とし、高木の説を非とし、毫も翼蔽する所なし。公使又曰く。諸君善く酒を飲む。曾

て聞く。拝焉の民飲むに「マアスクルウグ」Maasskrug を以てすと。諸君も亦時に之を用いること無きかと。余近衛公、加藤照麿と一「クルウグ」Krug を傾く。歓を竭して帰る。「クルウグ」は一「リイテル」の麦酒を容るゝ陶器なり。

『独逸日記』によると七月二九日の朝、鷗外は品川と朝食をともにしたことになる。その朝食後か、『蛍雪余聞』には近衛が同じ朝、加藤の訪問を受け、品川とその息子弥一とともに午前中、加藤の案内で市内を観光したことが記されている。

一行は昼食後、合流した姉小路とともに、原田の絵を見るためその下宿を訪ねた。今はもうないが、かつて美術学校（図2）の前にあった「カフェ・ミネルヴァ」(Cafe-Restaurant Minerva) の二階である（図3）。あいにく原田は不在で、この時会うことはできなかった。しかし、恐らく夕方頃、原田は鷗外や加藤らとともに公使一行を訪ね、有名なビアホール「ホーフブロイハウス」を案内したあと、前日、近衛と姉小路が行った「イングリッシュ・カフェ」で大いに酒杯を傾けた。

『蛍雪余聞』中、この日の記述の中で注目したいのが、「同氏の家を出れは左に凱旋門あり」という部分である。この凱旋門は、一八五〇年（嘉永三年）頃に国王ルートヴィヒ一世が建てさせたもので、門の上にはバヴァリア王国の象徴でもある女神バヴァリアの像が屹立している。それは次の通り、鷗外の「うたかたの記」の冒頭にも出てくる。

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神バワリアの像は、先王ルウドヰヒ第一世が此凱旋門に

据えさせしなりといふ。その下よりルウドヰヒ町を左に折れたる処に、トリエント産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバワリアの首府に名高き見ものなる美術学校なり。(13)

この門は戦争により一部破壊されてしまったが、戦車に乗った女神バヴァリアの像も含め、修復、再建されており、ほぼ往時のままの姿で現在も見ることができる（図4）。実際、原田の下宿があった場所の前に立ちルートヴィヒ通りの方向を向くと、女神の姿を左斜め後ろから見上げる形で凱旋門が見える（図5）。原田は下宿を出るたびに、あるいはもしかすると下宿の窓からも女神を見ることができた。

実は鷗外も自分の下宿（図6）の窓から別の女神バヴァリアの像を見ることができた。鷗外はミュンヘンに到着してから一〇日後、一八八六年（明治一九年）三月一七日の『独逸日記』に、「十七日。早起。仕女窓を開き雀を飼ふ。余偶然戸外を望めば、晴日テレジア牧 Theresienwiese の緑を照し、拝焉神女 Bavaria の像半空に屹立す。（後略）」と記している。「テレジア牧」は、現在も九月末から一〇月初めにかけて開催される有名なオクトーバーフェスタの会場となる広場で、そこにはルートヴィヒ一世が計画したバヴァリア王国の先人たちを祀る廟が建てられている（図7）。鷗外が下宿の窓から見ることができた女神の像は、その廟の前に立っており、高さがおよそ一九メートルもある巨大なものだ。

ふたりが身近に見ていた女神バヴァリアは、一方は獅子がひく戦車に乗り（図8）、一方はかたわらに獅子を従えている（図9）。龍と獅子という違いはあるが、この強い獣を従えた神のイメージは、原田の《騎龍観音》（図10）を想起させる。以下、詳しくは稿を改めたいが、《騎龍観音》をめぐってはこのイメージの相似もひとつの要素と

して取り上げる必要があるのではないだろうか。

筆者は以前、《騎龍観音》に表された龍に乗る観音のイメージと、ほぼ同じイメージを持った作品が、《騎龍観音》のおさめられた護国寺にあることを指摘した。[14] 観音のさまざまな変相を描いた鶴洲霊嚮の《普門品三十三身図屏風》中の一図（図11、図12）と、《騎龍観音》に表された観音の姿は明らかに一致する。ふたつを比べると原田がこの護国寺の作品ではなかったとしても、《騎龍観音》を描くに際してこのような観音の図像を元にしているのは確実だろう。そして、バヴァリアはこのふたつの間をつなぐものとして、つまり龍に乗る観音の姿を描くきっかけを与えたものとして解釈することができそうだ。

原田が《騎龍観音》のような作品を描き、第三回内国勧業博覧会という場に出品したことについては、洋画家としての原田を取り巻く社会的な状況なども考える必要がある。だが、《騎龍観音》はもう少し個人的な思いも込められた作品でもあるのかもしれない。これには、《騎龍観音》と「うたかたの記」は同じ年、まさに相前後して発表された作品であることも考え合わせる必要があるだろう。[15] 他にも要因はあったのだろうが、鷗外が《騎龍観音》について批判した外山正一に、徹底的な反論を行ったこともこのあたりに結びつけられそうだ。

「七月三〇日」

【蛍雪余聞】

卅日　加藤森岩佐原田天形の諸氏来る　直に停車場に至り十時四十五分の汽車を以て公使姉小路の二氏はサルツブルヒに向ふ　是に於て余と弥一氏は公使姉小路氏に分る（中略）森氏更に云ふ　今日午後スタルンベルヒ

湖を見る如何と　衆之を可とす　乃ち直に「イングリシ、カフェー」に登り午食し鉄路を以てスタルンベルヒに赴き同所より小蒸汽船を以て湖中を一周す　遠山突兀として湖面に映し其風景実に絶佳狩野法眼も之を見は筆を投するなるへし　皆船中に麦酒を傾け愉快極なし　船去ること少時向岸小宮殿を見る　バエルン国王の離宮にして二月前故ルードウィヒ王二世の病痾を養はれし所なり　又水面に一の木標あり　是同王の自ら身を水中に投し其遺骸を取上けし所なりと　石標を建んとする者あり　未た之に着手せす仮に木標をたつ　走ること時余一小村あり　之に上陸し一の茅亭あり之に息ふ　又時余再ひ水辺に行て船を待つ　青草漫々として氈毛の如し　余云ふ　徒らに之を待たんよりは寧ろ角力せんかと　皆云ふよしと　交る々々力を角す　船来る　乃ち船に上てスタルンベルヒに着き鉄路ミュンヘンに帰り一割烹店に晩食し此夜□□□□に泊す

【独逸日記】

三十日。朝公使及姉小路伯を送りて停車場に至る。午後近衛公、加藤、岩佐とウルム湖に遊ぶ。近衛公加藤と角觝の戯を作す。其相対するの状を見るに、公は身短くして肥え、加藤は長くして瘦す。観者皆笑ふ。已にして加藤を摑み、一間許りも投げ出したり。其膂力想ふ可し。加藤は是より数日間頭痛に苦みたり。是より余公と競争を為す。余敗北す。然れども角觝と違ひ、頭痛だけは免れたり。

この日の朝、公使品川と姉小路はオーストリアのザルツブルクに発った。原田は鷗外とともに、この出立を見送っている。その後、近衛はボンに戻ろうと考えたが都合のいい列車がなく、加藤や岩佐の提案に従って品川の息子弥一とともに出発を翌日に延ばすことになった。時間ができたため、一行は鷗外の提案によりシュタインベルクに

出かけ、午後をシュタインベルク湖周辺で過ごしている。

シュタインベルクは、鷗外が『独逸日記』で、「汽車に上りてスタルンベルヒ Starnberg に至る。地スタルンベルヒ湖 Starnbergersee oder Wuermsee に臨む。[16]」と記しているように、シュタインベルク湖（別名、ヴィルム湖）に面した町だ。現在、そこまではミュンヘン中央駅から電車で四〇分程。鉄道の駅と港が隣接しており、港からは湖畔のいくつかの景勝地を結ぶ船が出て、湖周辺を観光するための拠点となっている。これは当時からそうだったのだろう。シュタインベルク湖は、近衛が記しているように、およそ二ヶ月半前の六月一三日、国王ルートヴィヒ二世が謎の死を遂げたことで話題になっていた場所でもある。

残念ながらどちらの記述にも原田の名前が出てこないため、この時、鷗外らと同行したかどうかは確定できない。『独逸日記』には、原田とともに品川弥一の名前も記されていないため、品川とともにミュンヘンに残るなど、別の場所に出かけていた可能性も考えられる。いずれにしても、シュタインベルクへは鷗外もしばしば出かけて滞在しており、在留日本人たちにとってもお気に入りの場所となっていたようだ。この年の一〇月二三日には、原田も鷗外、加藤らとともに出かけている。[17]

「七月三一日」

【蛍雪余聞】

卅一日　午前加藤天形原田岩佐諸氏来る　弥一氏原田氏と共に出てイングリシ、カッフェーに行く　余は皆後に行かんと約し加藤天形岩佐の諸氏と談話し時余を費やし之を出て、イングリシ、カッフェーに至り共に午食

し終て岩佐氏の寓に至り又笑話す　又岩佐氏の誘導により一菓店に登り骨牌象戯の戯を為し発車の時を待ち一割烹店に晩食し八時発の列車を以てウルツブルヒに向ふ　送り来る者加藤岩佐森原田天形等の諸氏なり（後略）

【独逸日記】

三十一日。近衛公と弥一郎を送りて停車場に至る。

この日、近衛はミュンヘン滞在を終えることになる。滞在中、二八日に近衛と姉小路が見つけた「イングリッシュ・カフェー」は、お気に入りの店になったようだ。二九日に引き続き、原田は朝から品川弥一とともに出かけ、後に合流した近衛、加藤らと昼食をともにした。その後、岩佐の下宿などで時間を過ごした後、近衛と品川は午後八時の鉄道でミュンヘンを発っていった。この見送りの時には鷗外もいたようだ。「南独漫遊草」中、ミュンヘン滞在中の記述もこの日までで、以降、原田や鷗外の名前も見えなくなる。その後原田は、この年の一一月二九日にミュンヘンを離れ、パリなどに滞在したのち、翌一八八七年（明治二〇年）の七月に帰国している。一方で近衛は、さらにヨーロッパ滞在を続け、一八九〇年（明治二三年）の九月に帰国した。

結びにかえて

以上、『蛍雪余聞』の中から主に原田に関係する部分を抜き出し紹介してきた。四日間ではあったがミュンヘンで親交を結んだこのふたりが、この後、帰国後も含め交流を持ったのかどうかは、今のところ確認できていない。しかし、それが多少ではあっても続いていた可能性を示す資料と作品があるので、最後にそれらを紹介して本稿を終

えたいと思う。

まず資料というのが、『独逸日記』の同年一〇月九日の記述である。そこには、鷗外が原田のアトリエを訪ねたときに、「近衛老公」[18]の肖像を半ば仕上げていたことが記されている。作品が確認できていないため、確定はできないが、この「近衛老公」は、恐らく当時まだ存命だった近衛の祖父、忠凞のことではないかと考えられる。近衛の父、忠房は一八七三年（明治六年）に亡くなっており、近衛が幼い頃に薫育を受けたのは祖父であったようだ。[19]だとすると、原田はこのミュンヘン滞在中に、近衛から肖像画の制作を依頼されていたことになる。

もうひとつ、作品というのは原田が描いた島津久光の肖像である。この作品は現在、鹿児島市にある尚古集成館に所蔵されている。久光は、近衛の母光子の父で、近衛にとっては祖父にあたる。一八八七年（明治二〇年）に亡くなっており、肖像画はその死を偲び翌一八八八年（明治二一年）に描かれたものだという。[20]原田がその肖像を描いた経緯など未詳ではあるが、描かれた人物と近衛の血縁を考えると、近衛かその縁者が注文主、あるいは仲介となって描かれた可能性も想定できそうだ。もちろん近衛自身はまだ留学中であるため、仲介したとしても書面でということにはなるだろう。

注

（1）『原田先生記念帖』（原田直次郎氏記念会、一九一〇年）。

（2）近衛篤麿の政治思想については、以下の本で本格的な研究がなされている。経歴などについて本稿でも参照した。
山本茂樹『近衛篤麿　その明治国家観とアジア観』（ミネルヴァ書房、二〇〇一年）。

（3）近衛篤麿『蛍雪余聞』（財団法人陽明文庫、一九三九年）。上、中、下の三巻組。頁数は三巻通しで入れられてい

る。

(4) 前掲『蛍雪余聞』下、八七九頁。

(5) 前掲『蛍雪余聞』中、三七五～四一三頁。

(6) 前掲『蛍雪余聞』中、三八二～三八三頁。引用に際し、表記については、次の通りとした。原則として、旧かなづかい、旧字はそれぞれ新かなづかい、新漢字に改めた。本文は原文に従ったが、読みやすさを考慮してカタカナ文をひらがな文に直し、接続詞など一部の漢字をひらいている。

(7) 医学博士。貴族院議員。鷗外は、一八八六年（明治一九年）五月二八日の『独逸日記』で、「行止温和、共に坐すれば春風の中に在る心地す。」と評している。近衞も記しているように、父は加藤弘之。検事、弁護士、探偵小説家、貴族院議員の浜尾四郎、俳優、喜劇役者の古川緑波、戦前の音楽政策などに関わった音楽家、音楽評論家の京極高鋭は息子。

(8) 新村出は『蛍雪余聞』が刊行されたときに、「南独漫遊草」中に鷗外が登場することに興味を覚え、『独逸日記』と比較した紹介文を寄せている。（新村出「近衞霞山公と森鷗外博士」『図書』第四八号、岩波書店、一九四〇年、一一～一四頁）。

(9) 引用に際し、『蛍雪余聞』の表記については、注6と同様。『独逸日記』については、『鷗外全集』三五巻（岩波書店、一九七五、八七～一九一頁）から抜き出した。ただし、旧字は新漢字に改めている。以下、『独逸日記』については同全集を引用、参照している。

(10) ルートヴィヒ一世が建築を命じたこのホテルは現存する。

(11) 森鷗外（千八名義）「心頭語」一七『鷗外全集』二五巻（岩波書店、一九七三年）、一四八～一四九頁。初出、『二六新報』一九〇〇年三月八日号。

(12) 例えば品川は、原田が《騎龍観音》とともに第三回内国勧業博覧会に出品した《毛利敬親肖像》を毛利家へ納めるに際して仲介したり、病気で寝たきりにもなった原田を懇切に見舞ったりしている。（宮嶋一郎「原田家来簡集直次郎及びその遺族宛鷗外等書簡」『ビブリア』一〇〇、天理図書館、一九九三、一七六～一九五頁。）ふたりの間

には、陸軍少将で幕末の池田長発使節団、また岩倉使節団の一員として渡欧経験もある原田の父、原田一道の存在はひとつ考慮に入れていいだろう。

(13) 森鷗外「うたかたの記」『鷗外全集』第二巻（岩波書店、一九七一年）、三～二五頁のうち、三頁より。

(14) 「原田直次郎の第三回内国勧業博覧会出品について」、美術史学会全国大会における研究発表、二〇〇一年五月二七日。

(15) 《騎龍観音》は、一八九〇年（明治二三年）四月一日から七月三一日まで開催された第三回内国勧業博覧会に出品された。一方、「うたかたの記」は同年八月二五日発行の雑誌『柵草紙』第一一号で発表されている。鷗外の弟、森潤三郎は、同年一月に発表された「舞姫」よりも「うたかたの記」の方が執筆は早いと聞いている。（森潤三郎『鷗外森林太郎』森北書店、一九四二年、四二頁。）

(16) 『独逸日記』一八八六年（明治一九年）四月一八日より。

(17) 同日の『独逸日記』に、「二十三日。天気好し。土曜日。午後加藤、原田、浜田、岩佐と会す。加藤の発意にてスタルンベルヒ湖に遊ぶ。（後略）」とある。

(18) 一八八六年（明治一九年）一〇月九日の『独逸日記』に、「九日。原田を訪ふ。その作る所のミツテンワルド及コツヘルの図を観る。近衛老公、岩佐、浜田等の肖像半ば成れるものあり。」と記されている。

(19) 霞山会編『近衛霞山公』（霞山会、一九二四年）、白柳秀湖『近衛家及び近衛公』（国民新聞社、一九四一年）など参照。

(20) 『尚古集成館』（尚古集成館、一九八七年）、七二～七三頁。同館によると所蔵の経緯などが分かる関連資料は確認できていないとのことだった。

（和歌山県立近代美術館学芸員）

図１　ミュンヘンで撮られた集合写真（『原田先生記念帖』より）
＜前列中央：原田直次郎、左：加藤照麿、後列左より二人目：森鷗外（林太郎）、三人目：岩佐新＞

図２　原田が通っていた旧ミュンヘン・アカデミー（現国立ミュンヘン造形芸術大学）

図３　原田の下宿（カフェ・ミネルヴァ）があった場所

図４　ルートヴィヒ通にある凱旋門

図５　原田の下宿があった場所から凱旋門を望む

図６　鷗外の下宿があった場所

図７　先人廟とバヴァリア像

図８　凱旋門上のバヴァリア像

図９　先人廟前のバヴァリア像

図10　原田直次郎≪騎龍観音≫1890年　護国寺蔵

図11　鶴洲霊翯≪普門品三十三身図屏風≫部分
17世紀末頃　護国寺蔵

図12　同前、拡大

SUMMARY

Naojiro Harada in Munich as Seen in *Keisetsu Yobun* written by Atsumaro Konoye

Hisanobu MIYAMOTO

Naojiro Harada, a Western-style painter who was active in the mid-Meiji period studied in Munich, Germany from 1884 to 1886. Not many materials are left behind to show what he did during his studies abroad. Until now all that remained was a literary diary kept by Ogai Mori, a writer and Harada's best friend, as well as a commemorative journal compiled ten years after his death. This paper presents some new material, *Keisetsu Yobun* written by Atsumaro Konoye, and introduces its contents.

Konoye was born into a powerful aristocratic family and was an active politician in the same period as Harada. *Keisetsu Yobun* is a compilation of Konoye's youthful writings. Before entering the political arena, Konoye studied in Germany from 1885 to 1890. From July to August in 1886, Konoye traveled to southern Germany when he visited Munich and met Harada and Ogai who studied in Munich. *Keisetsu Yobun* talked about their meetings and we can grasp some significant facts about Harada's behavior during his stay in Munich.

キーワード：原田直次郎，近衞篤麿，森鷗外，蛍雪余聞，騎龍観音